ロバート・スミッソン
《ホテル・パレンケ》

Robert Smithson,
Hotel Palenque

訳＝小西信之

Translated by KONISHI Nobuyuki

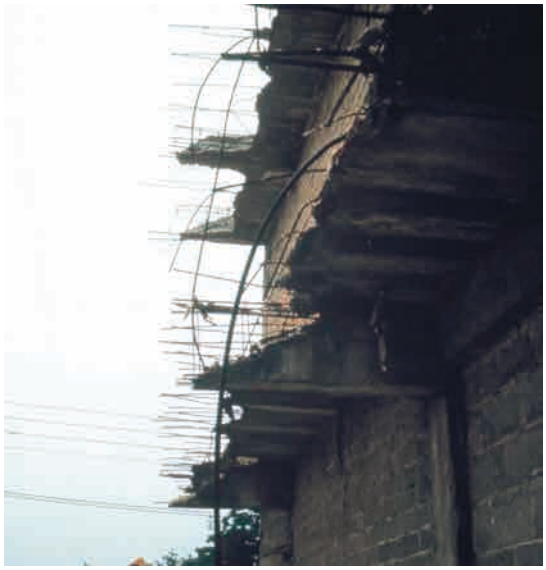
Hotel Palenque (1969-72) is a slide lecture delivered by Robert Smithson (1938-1973) to architecture students at the University of Utah in 1972, of 31 photographs he took of the hotel during a 1969 trip to Mexico. It is now considered a slide installation work featuring the recorded voice of the artist and these photographic slides(43 min.). Smithson refers to this old hotel, collapsing and being renovated at the same time, as "de-architecturized" architecture "with no center." It is a "ruin in reverse" that makes visible the process of its entropy, a key concept for Smithson. Analyzing this hotel-ruin in a talk laced with humor, Smithson connects the building's trivial details and unexpected features to Mayan Gods, aesthetic ideas, and contemporary art, arriving at his own unique interpretation.

This is a Japanese translation of the lecture. For the dictated text of the lecture, I depended on "Insert Robert Smithson: Hotel Palenque, 1969-72" in *Parkett* No. 43, 1995. (I added short phrases like "next slide" and "audience laughter.") For the copyright of the translation and photographs, I received permission through JASPAR from the Holt/Smithson Foundation/ VAGA and Art Resource/Guggenheim Museum, New York.

《ホテル・パレンケ》（1969-1972）は、ロバート・スミッソン (1938-1973）が 1969 年にメキシコ旅行の際に訪れた実在のホテル「ホテル・パレンケ」について、彼自身が撮影した 31 枚の写真を用い 1972 年にユタ大学の建築の学生に対して行なったスライド・レクチャーである。現在は、当時のアーティストの肉声を録音したテープとスライドを組み合わせた約 43 分間のスライド・インスタレーションとして残る。この古いホテルは、崩壊しながら同時に一方でリノヴェーションされる「脱建築化」する中心なき建物であり、スミッソンのキー・コンセプトであるエントロピーの作用が目に見える「反転した廃墟」である。ユーモアを交え、この建物の取るに足りない細部や予期せぬ特徴を、古代マヤの神殿や、深淵な美的観念 , あるいは現代アートに結びつけながら、このホテル＝廃墟を分析し、独自の解釈を加えるロバート・スミッソンのレクチャーをここに訳出する。

※テキストは、*Parkett 43* (1995) 掲載の Insert Robert Smithson, Hotel Palenque, 1969-72 を参照させていただいた。一部録音から補った。訳文中〔　〕内は訳者の補足。翻訳および写真の著作権に関しては JASPAR を通じ Holt/Smithson Foundation/ VAGA 及び Art Resource/Guggenheim Museum, New York より許諾を得た。

パレンケは、かつて実際に蛇の都市（シティ オブ スネーク）と呼ばれていました。ここにはかつて蛇を崇拝する人々が住んでいたのです。そしてある意味でこのホテルは、蛇がもつれ合うように建てられています。それは中心を持っていません、あるいはこの場所に中心を探し出そうとしても本当にできないのです。何故ならこのホテルはあまりにも未分化 de-differentiated であり、この場所全体のロジックを推し量ることはまったく不可能だからです。それを解き明かせる見込みなどとうてい存在しません‥‥そして実際、この素晴らしい着色された木製のファサード〔左下図〕を観て、午後の間ひたすらそれについて瞑想にふけることだってできるのです。次のショットお願いします。



このスライドは面白い状況を示しています。ある時点で、彼らは明らかにいくつかのフロアをつくろうとしたけれども、それはよいアイデアじゃなかったと翻意し、取り壊した。しかし壁の側面からこのように突き出て、不揃いで尖った、片持ち梁的光景（イフェクト）を残したのです。この様は、ある種ピラネージを想起させます。皆さんがピラネージの牢獄シリーズをご存知かどうか知りませんが、そこにはこういった本当に行き止まりのフロアや、ただ雲の中に消えて行く階段が溢れています。そしてこれは、言わばただぷっつり切れてメキシコの泥の中へと消えていく。そして壁面にこのかなり見事な構造物が残された。私はこのような手法（テクニック）がとりわけ好きなのです。それは言うなれば「脱 - 建築化 de-architecturization」です。不要なフロアの切断です。結局フロアは単に踏みしめるためにあるわけではない、つまり不完全（パーシャル）なフロアなるモチーフもありうるということです。実際私はホテル・パレンケで、この断面について瞑想して何度も幸福な時を過ごしました。私にとっては実に魅力的です。私はこの種の壊（ブロークン）れた様子が好きなのです。まさに、ハンマーが打ち下ろされ、コンクリートの破片が崩れ落ちていくのが見えます。次のショットどうぞ。

さてここがいわゆるホテルの中心ですが、ここは言うなればある種の投棄レンガの庭と言ってよいでしょう。レンガには実はいろいろな色が含まれています。というのは、よく見るとレンガ全体に、多色の石膏の小さな破片が混じっています。それでカメレオンやワニが這い回るのにちょうど良い場所となっています。その後ろにはとても素晴らしいドア装置（イフェクト）が見えます。この暗い通路に入っていったなら、そこに何が潜んでいるのか想像もつきませんが、まあ十中八九また曲がりくねった小道があるだけなのです。全てのもの、このホテル全体が、絡み合った上にさらに絡み合っているのです。ある種の巨大な繊細な透かし細工の塊が、ただそれ自身の周囲ににびっしりと絡みついているのです。またここには、このような無意味な、何かの柱が見えます。それは明らかに何らかの構造の始まりだったのですが、しかし実際そこはどうでもいいんです。というのもそれはあらゆる機能主義を言わばよせつけないからです。また私はこの波形屋根が特に気に入っています。この種の一貫性の感覚、さざ波が横切っていくようなそのあり方が好きです —— 緑を背景に青が綺麗に映えるようにうまく使われています。彼らが何故あの〔青い〕扉を設置したのかわかりませんが、し

かしそれはあるべき場所にあるように見えます。つまりそれはある種の驚くべきマヤ的必然性を持っているように思われるのです。ある種、熱帯植物のように発芽したのです。ある種のメキシコ地質学的な、人造の驚異です。次のショット行きましょう。

さてこれらは、屋根のないモチーフです。私にはこの上なく見事だと思われます。再び、トロピカル・グリーンの内部空間ですが、お分かりの通り、ここではすべてが非常にグリーンなのです。それは熱帯雨林の始まりに位置し、超飽和したグリーンです。私が言いたいのは、そこではすべてがグリーンに見えるということです ── 少しの青がほっとさせてくれますが僅かにすぎません ── そしてここにまたあの柱たちが見えます。はっきりとはわかりませんが、それらは松明か何かのための塔だったのかもしれません。火が灯ったらきっと素晴らしかったでしょうね。これは本当に古いホテルですが、見ての通り彼らは一気に解体するのでなく、部分的に取り壊していったために、完全な破壊という状況はまだ残されています。私にとって実はそれは非常に満足なところなのです。引き裂かれると同時に築かれるという建物はそう滅多に見られるものではありません。彼らが、ホテルのある部分がほんとうに必要かどうかわからないから、それをただそのままにしておくというのは非常にに賢い選択であるように思われます‥‥つまり、屋根のない部屋を望む旅行者や観光客がいつかホテルにやってくるかもしれず、それがいつかは決してわからないからです〔笑（聴衆）〕。ですから彼らは非常に抜け目がないというわけです。我々はホテルの新しい部分から見ているのですが、おわかりの通りそれも非常に未分化 de-differentiated な状態にあります。本当にいかなるロジックもありません。つまり、これはただのちょっとしたバルコニーであって、それがどこなのかも私にはわかりません。たんにそこが写真を撮るのに都合が良い場所だったのです‥‥〔おそらくスライドのバルコニーを指して〕そこです。次のスライドお願いします。

さてこれはホテルの中でもより興味深い窓の一つです。この窓から見晴らせるのは、というか実際は見えないのですが、というのは現地の人たちが土地を耕作できるように熱帯の群葉を焼き払うため、信じられないほどの煙の雲で大気が満たされてしまうからです。彼らはそれを「ミルパ」と呼びます。非常に古い農業の形態で、スペイン征服以前の時代にまで遡ります。しかしその靄の中をもし見透すことができるなら‥‥つまり実際にそ

の向こうを見ることができれば、古代都市パレンケの遺構、神殿、マヤの天文台、そしてスペインによる征服以前のインディアン〔原文通り〕達が建てたその他の驚異の断片がかすかに識別できるかもしれません。私にはこのホテルは、マヤ族が神殿を建てたのと同じ精神で建てられているように感じられるのです。多くのマヤの神殿がそのファサードを絶えず変え続けました。そのため、ある種のファサード内ファサードがあり、ファサードが重なり合い、またファサードの上にファサードがあるのです。この窓は、我々が現地で見に行ったもの〔パレンケの遺構〕を実際はるかに見渡すことができるのですが、このレクチャーではそういった神殿はどれひとつとしてお見せしませんが、それは自分で行って自分の眼で見なければならないものです。そして望むらくは、みなさんがホテル・パレンケを訪れ、マヤ族がどのように今も建物をつくっているかについて何事かを学んでほしいのです。その構造には、ある意味で、典型的なマヤの神殿に見い出される絡み合いと暴力のすべてがある ── とりわけ多様なウシュマルの神殿群は、この上なく‥‥それはマヤ・バロックと呼ばれ、螺旋模様と細枝織文様や様々なものの形状に彫られた岩で埋め尽くされた蛇のファサードでできていて、大変素晴らしい。ですから私にとってこの窓は、一見したところ何の役にも立たないこの窓は、実にメキシコ的気性（テンペラメント）に関したくさんの真実を呼び起こしてくれたのです。次のスライド行きましょう。

この通路は何らかの中心に向かっているように見えるかもしれませんが、そうではありません ── だから〔中心には〕行けません。いずれにしてもそれは何かに向かっていっているように見えますが、しかしどこに導かれるのかを知ろうとしても無駄です。私はこれは単純明解な遠近法だと考えたいですね。実際このタイルは、現在ニューヨークで描かれている大抵の絵画よりもはるかに面白く、ずっと想像力豊かだと感じられます。これはまた、モーテル風建築物の新しい部分の前にあります ── それはモーテルでもホテルでもあるようですが、このような建築物でその区別をつけるのは困難です。両者は互いに絡み合い、互いを見失い、互いに打ち消し合うように思われ、その結果、自分がモーテルにいるのかホテルにいるのか、まったくわからなくなります。では次のスライド。

これは実際は部屋で、未完成の部屋のひとつです。ここには、一種のジャスパー・ジョーンズ的単純さが見られ、また、入り込めない何か、到達し難い何かをも暗示しています。ドアからドアへと渡されたこれらの閂は、より強い感覚を・・・より近寄りがたく、より生気がなく、閉ざされた、隔たった部屋に感じさせ、この複合的な建物の外にあるパレンケ遺跡の主神殿の中の墓穴のようです。手前に濠のようなものが見えます。それは本当に濠なのですが、私がいた時は干上がっていました。おそらくそれは、蛇の穴とかそういった類のものとして利用できたのでしょう。では次のプログラム。

さあ、ここで我々はこのホテルの中でも、より創意工夫に飛んだ場所のひとつにやってきます。彼らは一時、スイミング・プールが欲しくて、このプールをつくったのは明らかです。でも実際は、このような場所に来て泳ぎたいと思う人は誰もいないわけです。そんな必要性はまったないわけですが、しかし私はこのような子供っぽい部分が先立って、もっと大人の部分は後から来るという感じがとても好きです。つまりそれはある種何かを期待させておいて、何も果たしてくれるわけではないのです。それに、もし実際に水を満たしたとしたら、プールの側面から突き出ている尖った石で、誰もが脚を切って怪我している様子が想像できます。このプールを横切って、右手の隅に吊（サスペンション）橋が見えます。私はこれは実に、最もユニークな見物のひとつだと思います。このプールはまた、そこら一帯を這い回っているイグアナのためのある種の檻のように機能します。私は無性にそれに惹かれます。それは本当にぶっきらぼうにつくられており、古代マヤ・アステカ文化のあらゆる恐怖と不安、人身御供と大量虐殺を呼び覚まします。では次のショット。

これは跳ね橋（ドローブリッジ）の別の写真で、跳ね橋の行く先がわかります。それは実のところ小さな酒場（バー）なのです。ひどく閉所恐怖症を引き起こすような場所で、閉鎖されています。私はこの眺めが好きなのです。この空のプールに渡されたこの吊橋（サスペンションブリッジ）、これらの素晴らしいレンガの壁、それらがまさに深い満足感を与えてくれるのです。その肌触り（テクスチャー）が本当にすばらしく、そこには本当にマヤ的な精神が宿っていると思います。また、マヤ族は石切り場から石を切り出す必要はなく、ただ石を探しに行き、地面から掘り起こせばよかったのです。というのもこのあたりの土地一帯はこうした破砕した岩石だらけだったからです。これはものをつくるにはすばらしい方法だと思いますが、彼らも同じことをしたはずです。それから小さな狭い通路（キャットウォーク）がプールの周りを走っているのが見えます。そこをゆっくり慎重に歩いて行けば、イグアナやらそういったものをもっとよく見ることができます。さてこの跳ね橋を歩いて渡り、そしてあの使われなくなった小さな暗い酒場を通り抜けていくと想像してください、すると‥‥次のスライドお願いします。

ダンスホールに着きます〔笑（聴衆）〕。これはダンスホールなのです、もちろん使える状態にはありません。アメリカ南部から持ち込まれた植物のサルオガセモドキが、今ではこれらのロープから優雅に吊り下がっています。彼らはこの四角い箱の囲いをつくり、そして全体をこの木組みで単純に覆い、次にその上にこの半透明のプラスティックを被せようとしたのです。しかし近所の子供達全員がプラスティックの屋根めがけて石を投げ続け、全部ビリビリに割いてしまいました。そのことは人々がダンスをしているときに少し水を差しました〔笑（聴衆）〕。なぜならいつ何時、外から人が石を投げ、踊っている人の中の誰かにあたるかもしれなかったからです。ですからダンス・ホールの人気は下落しましたが、まったく驚くべき内部空間だと思いますし、私にとってはとにかく十分に満足できるものでした。ではもう一枚のスライド。

これは楽団が演奏した舞台です ── かなりいい曲線です‥‥曲がっています‥‥実際、曲がっている曲線（カーヴィング・カーヴ）です。置き去りにされた椅子は、時間と宇宙のはかなさを強く心に訴えてくるように思います。また屋根の構造もさらによく見えます。私はこれはかなり驚くべき建築作品だと思うので、パレンケに行ったときは、是非忘れずに見てください。次のショット行きましょう。

さてここは、ヴァージニア・ドゥアン〔ギャラリーのオーナー〕とナンシー・ホルト〔スミッソン夫人〕と古代マヤの神々の盛衰について何時間も楽しく議論して過ごしたレストランです。色んなことを議論しました。実際、古いメキシコの神々はひどく残酷でした。実を言うと彼らは極めて興味深い仕方でトウモロコシの‥‥農業を行っていたんです。トウモロコシを植え種を蒔くとき、彼らは赤子をひとり捧げたのです。赤子の全身を切り刻み、トウモロコシの種に沿って植えたのです。そしてトウモロコシが少し育つと、彼らは少年をひとり捧げ、彼の全身を切りきざみ青臭いトウモロコシの若芽に沿って植えた。そしてトウモロコシが十分に育ち、収穫できるようになったとき、同じことを老人でやったのです。ですからそれが言わば、メキシコの大地に潜むあの感情をわれわれにもたらすのです。メキシコには何かがあり、風景それ自体の中に全面的な暴力が覆い隠されている。多くのアーティストや文筆家がメキシコに行って、完璧に破壊されてしまった。それがメキシコを去るハート・クレイン〔20 世紀初頭の米国の詩人、メキシコ湾に投身自殺した〕に起きたことです。彼は船尾からスクリューへ向かって跳び降り、ずたずたに切り裂かれた。だからメキシコに行くときは、それ ── 大地のあらゆる部分に潜んでいるこの種の無意識的で危険な暴力のいずれにも巻き込まれないように十分に注意しなければなりません。それはまさにそこに存在し、いたるところであなたを捕らえようとしている。常に用心する必要があります。そこで話していた間われわれは、ガテマラ周辺のジャングル地帯を案内してくれることになっているガイドを待っていました。彼は非常に面白い男でした。ヒッピーなら彼の元で無償でも働きたくなるような男です ── ある種ロマンティックなフラワー・パワー的考えですが ── しかしあるひとりのヒッピーは、初日の仕事が牛を去勢するだけだったので、やめてしまいました。われわれはそこでただ時間を費やしていたのですが、まるでものすごく長い時間を過ごしたかのようでした。実際こんなメキシコの午後は信じられないぐらい長いのです。ひたすら延々と続くので、メキシコの神々のあらゆる化身たちを知ることができる。非常に沢山の化身がおり、彼らはとても獰猛です。ですからもし皆さんが行くことがあれば、私が護衛しましょう。では次のスライド行きましょう。

ここでは建物の近代的な部分が見えます。これを見て皆さんの頭の中ではわかり始めているだろうと思います〔笑（聴衆）〕。つまり私が言おうとしている要点（ポイント）を皆さんは理解しつつあると思います、実際それは要点（ポイント）でも何でもないのですが。この場所全体を通じて興味深いのは、休息の地点（ポイント・オブ・レスト）が全くないということです。これらのものはただの、どこかへ行くための純粋な足場かスロープに見えます。実際、スロープを登って部屋に上がることができます。丸太をそのまま使うこと ── 木の棒とレンガで上階を支えているつっかい棒 ── は、それ自体で完全な刺激的（トリップ）な体験となるでしょう。それに本当にはまって、極めて直接的状況にあるあのテクニックだけについて丸々一本の論文に取り組むことだってできるでしょう。またこの後ろがとても暗いのがわかりますが、実は〔そこから〕このホテル全体を見通すことができます。次のスライド行きましょう。

これはランプのもう一枚のショットです。こっちの方が良く見えます。やや物思いに沈んだ感じの椰子の木がうまい具合に配置されています。椰子の木は熱帯にいるという実感を与えてくれます。とうとうたどりついたこの地で、はじめて椰子の木を見ているという感じです。何と言うか、椰子の葉がぐったり垂れ下がっている時の沈んだ効果を、元気がない時にはそんな気分、ある種の落ち込んだ気分として受け取ってしまいますが、このような気分が沈んでいる時に同時に、メキシコの大地に存在する力は、もう一度すごい活力を与えてくれ、あらゆる事に立ち戻るよう駆り立ててくれます。すぐにもピラミッドに向かって走り出し、あの階段を登り、そしてあれもこれもやってしまおうとするのです。垂れ下がった椰子の葉について長く話す時間はないのですが、皆さんにとって、それを形として、形態として、折り重なり、ただそこに垂れ下がっているその様子を見るだけでも面白いのではないかと思ったのです。実際不思議ですが、人はしばらくすると興味を失い、見るのをやめ、その後別のことに向かいます。では次のスライド。

さてこれは塔の中のひび割れのような部分です。塔全体の写真を撮らなかったので、この塔の断片で我慢していただかなければなりませんが、このひび割れはつぎはぎ修理されています。これもまた、創意工夫に豊んだ方法で補修されているのがわかります。割れ目に沿ってほとんど縫い目のようなＸ字の印があるのがわかります。まるでこのレンガの壁が傷を負って、言わば建築的外科医によってしっかりと縫い付けられたかのようで、立ち止まってじっと見てしまいます‥‥。次のショット。

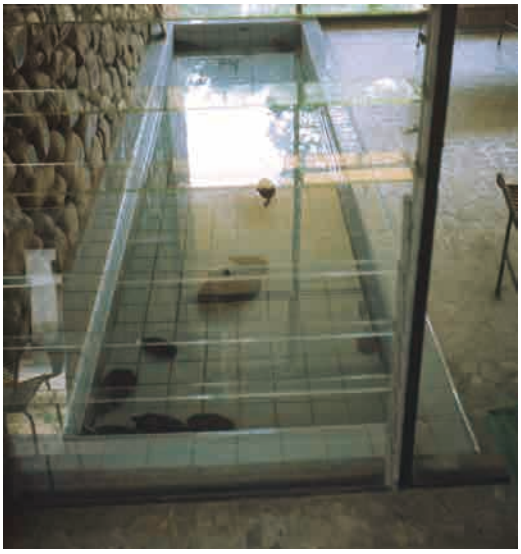
これは崩壊している場所です。ここは・・・実際とても感動的です。階段が完全にくずれ落ちたところが見え、無人の古いのモーテルの区画があります。ここで再び、一気にすべてを破壊し尽くしはしない、彼らの慎重なやり方がよくわかります。それは一定の繊細な感受性と優雅さをもってゆっくりとなされるのです。だから、壊れたコンクリートから群葉が伸び、壁面の様々な色が太陽の光で褪せていく時間があるのです。だから、このような、何かが時間の中に入ったり外に出たりし、大地に属さなかったり、大地に本当に深く根ざしたりという、このような実に官能的な感覚が与えられるのです。このような脱 - 建築化 de-achitecturization が、この建築物全体に浸透しているのです。そして思い出してほしいのは、ここには中心がなく、焦点もなく、掴めるものもなく、確かなものはなく、あらゆるものが完全に行き当たりばったりに、誰かの日常の活動を楽しませるためになされている、ということです。OK、では次のショット。

これは、つっかい棒の柱たちの別の眺めです。実際ホテルのかなりの部分を支えています。左上の隅を細かく見ると、壁にあいた穴からロビーが見えます。再び、ホテルの一方の側から他方の側へ行って、また戻ってくるような、前に行っては後ろに戻り、右に行っては左に戻っているような空間感覚に見舞われます。それからつねにちょっとした色彩があって、ちょうどあの赤の小片が全体を引き立たせ、言わば色彩の刺激に事欠きません。後方には ── ほとんど見分けられないと思いますが ── 捨てられた冷蔵庫のようなものがそこに鎮座していて、そしてまたその後ろには ── ほとんど見えないと思いますが ── 注意して見れば、我々の車が見えます。右側の二本の柱の間のあたりにあります。実際、我々はレンタカーをそこにそんな風につけて到着したのです。また、ここにはいかに、凝った細かい細工や過度に神経質なものがまったく存在しないか‥‥彼らが堅苦しい人々ではないということがわかると思います。彼らが何かを削った時、削り屑はただそのままにしてあり、それが室内の全般的な感じ、雰囲気の一部となるのです。

再び影の中にわれわれの車が見えます〔右端〕。背景に例のつっかい棒が見えています。しかし手前には、なんと言ったらいいでしょう、そうセメントの小山があります。彼らがそれでいったい何をしようとしていたかはまったくわかりませんが、それはただ自らそこにあります。つまりセメントの山ほどまさにセメントらしいものはないということです。それはどこにも行かず、ただそこにある。ただそれについて考え、セメント性について掘り下げましょう。それがどんな用途に使われるかなんてまったく気にしてはいけません。それはたまたまそこにあり、そしてその退屈さがある種の雰囲気、ある種のスリル、そうでなければ帯びなかったはずのある種の意味を附与しています。そしてその背後に、古いセメントの袋が見えます。何らかの確かな用途が決まっているわけでもなく、ただそこに、きちんと重ねて積み上げられているだけです。実際、積み重ね構造は、非常に強固な建築的、構造的手法です。例えばいまからこの世の終わりまでただものを積み重ね続けることだってできます。するとビルのようなものができるでしょう。実際それをセメントで固める必要はありません、ただセメントを混ぜて、その上にものを積み上げていけばいいのです‥‥それからもちろん、そこにある柱のことを言うのを忘れていました。また別の柱があります ── われわれは皆、柱というものについては実際よく知っています ── そしてそれは無愛想で、控え目で、自分に注意を向けさせることもなく、自分が建築なのだと主張しないのです。では次。

これは壊れたレンガの山の別の眺めです。おもしろいと思ったのは、この草の生え方、レンガの山の中へ消えていき、そして後方の群葉の中に後退してく様です。その背後には先ほど話したレストランがあります。では次。

これは壁の中の小石です。無数の小石が、非常に丁寧に枠の中にただ嵌め込まれています。私はこれがけっこう好きで、いわばある種の無限的状況を暗示しています。



さて我々はとうとうホテルのロビーに来ました。そしてガラス越しに見ているのは亀のプールで、何匹かの亀が泳いでいるのが見えます。鰐も一匹いまが、彼は亀にちょっかいを出そうとはしていないようです。面白かったので、皆さんがこの建物に入った時は、ぜひこの亀の池を見てください、ちょっと愉快な状況です。

亀のクローズ・アップの別の写真です。ここに何匹かいます・・・小さな岩がそこにあって、彼らはそこに這い上がりそして・・・空気を吸うわけです〔笑（聴衆）〕。

ここは興味深いです。再び庭で、いくつかのレンガを積み上げて、その上に丸太がほぼ水平に載せられています。これは何かを意味しています。それが何なのか、そこにいる間決してわかりませんでした。でもある種の刹那性が暗示されているように見えました。今にも何かが起きそうな感じです。我々はちょっとそれにとらえられました。本当に今にも何かが起こるんじゃないかと感じたのです。それはしるし、実際に時間を超越した何者かからの合図=しるしのようでした。手前に誰かの水着が干からびているのが見えます〔笑（聴衆）〕。時折、わずかな人間的要素らしきものがあります、人間と自然の要素そして‥‥人間によって手を加えられた草地。でももちろん、皆さんは多分背景にあるあの扉のことはもうよく知っているはずです。まだそこにあります。では次。

塔です。またしても、私は塔の全体像を捉えることができませんでした。私は未完成の屋根か部屋か何かわかりませんがその上にいます。彼らはこの場所にホースで水を撒いたんですね〔笑（聴衆）〕。泳ぎたくない人々のための足を浸す池にすることもできたでしょう〔笑（聴衆）〕。この塔は非常に興味深い。内部にはある種の螺旋階段、四角い螺旋階段を収めています。次のショットで見えるかもしれません‥‥。どうでしょう。

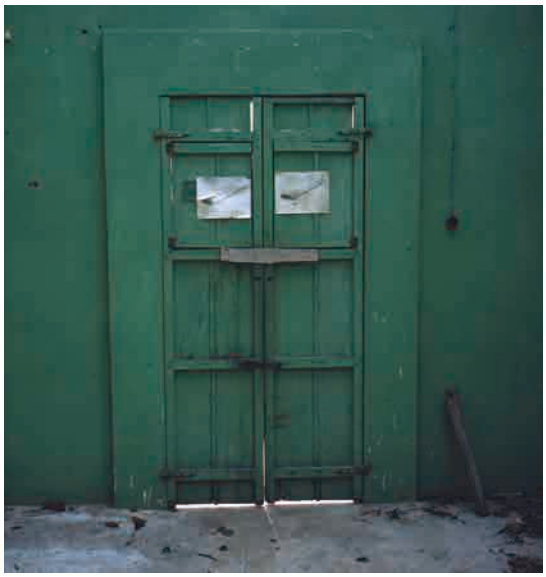
違いましたね。いいでしょう。この写真からは、このレンガがある種の曲線を持っているがわかります〔笑（聴衆）〕。それは強化され、優れたテンセグリティ原理〔バックミンスター・フラーにより提唱された概念で、Tension（張力）とIntegrity（統合）の造語〕のようなものを持っています。それは自らを支えようとします ── ある種の張力がそこにはあるのです。優れた構造的思考です。そしてそれはそこにあるテーブル同様、魅力的です。堅固なレンガの脇に、このテーブルがあるのです‥‥この上でピクニックが出来るかもしれませんが、最善の方法で

はないかもしれません。その下にミネラル・ウォーターの瓶が置いてあります。それといくつかの立派な鉄の格子状の細工物 ── おそらく錬鉄製だったかと思います ── そして梯子があります。この場所には梯子がたくさんありましたが、記録するに値すると思ったのはこれだけでした。そしてよく見る鉄棒が何気無く脇に寄せてあります。彼らがこのレンガでいったい何をしようとしているのだろうかと思うわけですが、次のスライドに進まなければなりません。

これは円形庭園でサトイモが生育していますが、一段低く窪んでいます。そして左手の奥、注意深くよく見ると、先ほど話したレストランの終端部が見えます。そしてその後ろに再び、おそらく見納めになりますが、吊り橋のかかる干上がったプールの姿が見えます。脇にある通路は非常にがっしりと作られています‥‥本当にそこにあるように見えます。雨が降っても濡れません。それはこのホテルの多くの便利な点の一つです。

これは同じ通路の‥‥ちょっとスライドのピントが合っていませんが‥‥それでむしろ別の次元が付与されています〔笑（聴衆）。実際にスライドのピントがボケている〕いずれ焦点は合うと思いますが、あえてぼかしてみることもできるでしょう。実際ぼけるというのは興味深い効果なんですが、その時間はありません、もっとやるべきことがあります。まだピントが来ていません･･･はい、きました。通路の最上部が見えています。これはある種非常に単純で真っ平な外観で、その上をこれらの白いバーが横切る直截性（ダイレクトネス）に、ある種ミニマル〔・アート的〕なセンスを見ることができます。それから脇に目をやると、右の下の方にいくつかの枕が見えます〔笑（聴衆）〕。それらは雨水を貯め込んでいます。それが枕がしているすべてです。仕方がありません。それらは、物自体としての枕なのです。OK、次行きましょう。

これが興味深いのは、パレンケの主神殿を訪れたことがあれば誰でも、メキシコでも数少ない墓が発見されたピラミッドの一つだということを知っているはずです。ピラミッドの中心部に降りていく階段があり、そしてこの階段の底、ピラミッドの中心に彼らは老いたマヤの王を埋葬し、それから自分たちがつくったこの階段を土で埋めたのです。彼らはこれと非常に似たモールディング〔ここでは壁と階段の境目にある「幅木」を指す〕を残しています。ただしそれは老いたマヤの王の霊がこのモールディングを通って現れることができるよう、中が空洞になっています。ある種のチェンバード〔室のある〕・モールディングと呼んでみてもいいでしょう。これは実際ほんとうなのです。パレンケの神殿に行ってみればそれが見れます。しかしそれとまさに同じモチーフがこの塔の中にはあったのです。このモールディングの中が空洞なのかどうかは分かりませんが、つまり確かめなかったんですが、しかしそれは見かけ上同じでした。それでこれはかなり面白いなと思ったわけです。次に行きましょう。



これが最後の一枚です。これは言わばドアです〔笑(聴衆)〕。まず気づくのは、その背面が緑色だということですよね。これについて言うことはほんとうにたいしてありません。と言うのもそれはただの緑のドアだからです。我々は皆人生で一度は緑色のドアを見たことがあると思います。これはそんな風に普遍性の感覚、ある種の地球的規模の結束の感覚を放っています。このドアはおそらくどこでもない場所(ノーウェア)に向かって開き、どこでもない場所(ノーウェア)で閉じるでしょう、それで我々はこの閉めたドアとともにホテル・パレンケを後にし、ユタ大学に戻ると言うわけです。OK、以上です。〔拍手〕

©Holt/Smithson Foundation/VAGA at ARS, NY/JASPAR, Tokyo 2018 C2597
Art Resource/The Solomon R. Guggenheim Museum, New York